正井文樂軒大阪へ來る

文樂座の始り、代々の座主一覽

義太夫………二代目義太夫の政太夫………近松門左衞門………によつて義太夫節が確立した。竹田出雲………吉田文三郎………によつて人形舞臺が大成した。この連續八十三年間の業績による人形淨瑠璃も、すぐその後につゞく傑物が出なかつた爲めに、天明………寛政………享和の頃になると、もう殆ど四分五裂で、一定の劇場がない爲め竹本座や豐竹座の殘黨その他の末流が、或時は道頓堀の各芝居、曾根崎その他で隨時隨所の其日ぐらしの興行を續けてゐるに過ぎないといふ情勢であつた大阪の地へ、測らずも淡路の仮屋から、文樂座の元祖正井文樂軒が現はれて來た。

さて、文樂座の創始から、代々の文樂座主の事績について、明治大正にまで筆を伸ばして、讀者の便宜上、これを總括して述べることとするが、それは別著の『淨瑠璃研究書』中に既載

したが、こゝには其重複を厭はず左に轉載することにした。

文樂軒とは雅號で、本名は正井嘉兵衛、淡路の人、十三歳で淨瑠璃を語り、文樂軒と名乘つて中國筋大名を歴訪しては、得意の淨瑠璃を聽かせたから、その名は相當知られてゐたらしい。大阪に上つて來たのは、明和とも天明とも寛政とも、諸說區々であるから確には云ひ切れないが、大阪での第一記錄を止めた場所は、南區高津七番丁、高津の入堀川に架する高津橋の南詰西へ入つた濱側だと云はれてゐる。此處へ文樂軒の淨瑠璃稽古所といふ看板を上げ、淨瑠璃を敎へたり、又自分で語つたり、時には聽手の中から希望者には舞臺へも出してやつたから、人氣が立つて、文樂軒の稽古場と稱して追々世間に知られるやうになつた。次いでは、玄人を抱へ人形を加へて、純然たる人形淨瑠璃座を組織するまでに進んだ。それは文化二年との說もあるが、兎に角文化八年一月からは、ズツと東區博勞町稻荷神社内南門内の東方に座を置き、天保十三年の宮芝居禁令降下まで引續いてあつた事は、番附によつて確證される。但し文樂第一世文樂軒は、既に文化七年七月九日に死んでゐるから（法名は樂道）、此頃は第二世淨樂翁の世代であつたと思はれる。淨樂翁は文樂軒の嫡子らしく、素人淨瑠璃として父と優劣なき語り手だと傳へてゐるが、其他の事は判らない。

文樂座――實は文樂軒の芝居が正しく、文樂座と唱へたのは明治四年九月以後であるが、便宜上文樂座と呼ぶ事とする――は、前に述べた通り天保十三年五月、社寺内の芝居興行禁止となつて、同十四年二月から北堀江市之側芝居に移り、四月、五月と續け、翌弘化元年一月から道頓堀若太夫芝居へかゝり、一月、三月と打つたが、其後、二年、三年、四年は記錄不明。翌嘉永元年正月は若太夫芝居に興行したが、又打絶えて、同四年五月若太夫芝居へ、翌五年中も明かならず、同六年二月には又若太夫芝居に、十月も同芝居に興行した。

翌安政元年一月からは、南區清水町濱（四ツ橋東詰南、御池橋の南邊）に根據を構へ、同三年八月まで連續興行した。この新埋立地は他の興行物も地固めの爲め許可され、天保禁令後程なく拓けて明治へかけての道頓堀に次ぐ繁華境であつたことは、吉田玉造の紙人形事件の騷動などと共に後に敍べる。

天保禁令も時日の經過で漸く薄らいだところから、文樂座は舊地の博勞町稻荷社內へ復歸を願ひ出たが、許可の恩命を得て、安政三年九月、再び舊場所に開場の運びに至つた。この當時には、文樂座主として一世の傑物三世文樂翁が頭を擡げて現はれて來た、そして文樂座の興隆に鋭意精進したのである。

文樂翁（初代は文樂軒、二代は淨樂翁）は初め樂翁と稱し後に文樂翁と稱した。大藏と呼び、文化十年十二月十六日生とあるが、實は正井家門前に棄てられた人だと傳へる。天性慧敏、能く時勢を見て動くの明があり、また文藻にも富んでゐた。初めは長門、團平と提携し、後に春、玉造、越路と結び、五世彌太夫とも親しかつた。文樂をして天下の文樂たらしめたは此人であつた。明治二十年二月十五日を以て此世を辭した。享年七十五歳。

始め正井氏であつたが、後に植村姓に改めてゐる。天保十四年建立の遊行寺碑文には、正井大藏とあるから、改姓は其以後の事であらう。それ以來植村姓で續けられたが、思ふに捨子であつた文樂翁は、實家の植村姓に還元したのではあるまいか、これは私の臆測に過ぎぬが。

明治になつて、大阪府は西區松島の新開地發展策として遊廓を置き、更に歌舞伎と人形淨瑠璃座の移轉を計畫した。文樂座が其勸誘に應じて、博勞町稻荷社内から出て、松島の新築劇場（今の八千代座）へ移つて行つたのは明治五年正月興行からである。そして十餘年間を松島文樂座として續けた。但し五年八月と、六年一月とは舊地稻荷社内で臨時興行をやつてゐる。

明治十七年に入り、文樂の舊地稻荷境内北門に（文樂座は同社内東芝居）彦六座が生れて大に氣勢を上げた。この影響は地利に不利な松島文樂座に忽ち波及したので、同年九月、松島を

引拂うて東區御靈神社境内に移轉することになつた。爾來、御靈文樂の名で呼ばれ、大正十五年十一月の失火燒亡まで興行を續行した。たゞ此間、劇場改築の爲め、十九年二月、三月、五月、十一月の四回だけは、松島に臨時出張した。

翻つて、文樂座主を見ると、傑材文樂翁歿去後、實子植村大助が嗣いで四代目の座主に坐つたが、溫柔で才腕に乏しい人、骨董好きで暢春堂と稱し支那貿易など始めて、大失敗を釀し資産を蕩盡した揚句は、父の死後三年目の明治廿三年三月一日に、其後を追うて物故した。

五代の文樂座主は、大助の實子泰藏が繼承したが、病弱の上に素行修まらず、仍て文樂翁未亡人ハル子が一座監督に從事した。俗におゑいさんと云はれ幕内信賴の的となつてゐたが、座運振はず經營困難の極、明治四十二年三月、一座を擧げて松竹合名會社に讓り渡すことに決着した。そして日本に唯一の存在である人形淨瑠璃座の壞滅を防ぎ、植村家の危機をも救ふ事が出來た。かくして、長門太夫や文樂翁の丹精で育成された人形淨瑠璃の大殿堂文樂座も、純興行家たる松竹の手に移ることになつた。此際、引繼がれた座員の數は、太夫三十八名、三味線五十一人、人形遣ひ二十四名となつてゐる。

松竹の經營に移された文樂座は、概して順調に進んで行つたが、大正十五年十一月廿九日午前

十一時劇場内から失火燒亡の厄に遭うた。翌昭和二年正月より道頓堀辨天座に引越し興行、同五年正月、舊近松座跡の南區佐野屋橋南詰の地に新築成つて移り今日に及んでゐる。以上、文樂創立以來の經過概觀である。

この間、舊文樂座主の五代植村泰藏は、惡疾を得て大正初年に狂死し、女傑ハル子は同末年六十餘歳で歿去した。斯くして天下の文樂を築いた興行界の巨人文樂翁の面影は、纔かに下寺町遊行寺の一隅に聳え立つ大碑石によつてのみ偲ぶの外はない。

文樂翁の墓碑は、天王寺區下寺町遊行寺に在つて、碑面悉く其經歴の刻文で埋めてゐるが、巨碑の事とて視野に入らず、判讀し難い爲め心ならずも其儘になつて居たが、去年道路修築の爲め碑石移轉の好機を掴んで、近く筆寫したのが左記の全文である。今後再び近く見るの機もあるまいから、好學人の爲めに、活字として殘して置く。

寺内には此巨碑の他に、正井大藏が天保十四年秋に建立した『文樂先祖之碑』がある。併せ觀る可き肝要資料であるから、先づそれから紹介する。

碑の正面には、釋樂道、釋妙敎、正井氏とある。樂道、妙敎は、正井大藏こと文樂翁の祖父母の法名で、大藏が天保十四年に舊碑を改造して建立したものである。

維時天保十四癸卯秋改造舊碑也祖父樂道文化七庚午秋七月九日歿爲祖母妙教天保十一庚子冬十二月八日歿也依之聯名而建之矣舊碑先淨樂翁與宗族龜井儀兵衞者共合力營之云其先人之志爲示子孫記之――三世孫　正井大藏源應親敬白

さて、文樂翁の碑は明治廿二年十二月、四代の大助が建立したものであるが、この建碑式は明治廿三年八月廿三日で、大助歿去の直後である。その碑銘全文を掲げる。

吾皇國偶人劇場而最完者其唯文樂歟故嘗群聚而充溢於其場夫維新以還吾國與萬芳通信頗廣矣故各國人亦時々觀之而賞嘆焉然則可謂海內之最也夫文樂翁者姓植村稱大藏阪府人其王府稱嘉兵衞幼而善淨瑠璃語十有三而自號文樂軒嘗歷遊於中國倚諸大姓招請而演之其音調不凡聽者莫不感賞迺顯名於天下其子繼焉其技亦類於考稱贈復與考同嘉生翁々繼考業其技優於王父蓋翁者三世而顯名於海內故當今嚴然其場盛昌無比是皆翁之廣德居多矣且翁天賦豁達大度而文雅之玄嘗云予劇場主何當於大方君子耶不顯其雅於外平素與之對則如常人然入其室而觀其陳列則脫塵而實希有之士也是以世人槩慕其惠有餘暇則娛樂茶讌或飛羽觴遺興故三都諸大家亦無不稱翁德明治二十年歲次丁亥二月十有五日不幸罹病而遊於仙都行年七十有五埋遺髮於遊行寺中哲嗣大助建碑於玆迺作銘曰

者永々者　孰謂之拒　有赫々者　孰謂之淺　歿而有聞　孰謂非遠　泉深
上滿　望之累如　文翁之穩

明治二十二年歲次己丑十有二月下浣

後學　華陽　貫陽處士小田堅撰並書

以上兩碑の刻文によつて、文樂座主の記錄が漸く明かになつたやうである。たゞ三代の文樂座主文樂翁の斯道貢獻の業績に就ては、尙多くの話材も持つてゐるが、兎に角淨瑠璃史上の偉勳者として、永く銘記す可きであらうと思ふ。（以上『淨瑠璃研究書』轉記）

說教讃語座の來襲

文樂座との大激戰

話は天保の淨瑠璃界に還る…………

百數十年來儼然として存續し、何等外部の物の侵すことのない、威容堂々たる義太夫節の世